

読む葡萄酒



〜その①〜

左京区 山本 博

「読む葡萄酒とは」

葡萄酒は本来「飲む」ものであって、「読む」ものではありません。しかし同じ葡萄酒でも、ただ「飲む」のと、それを知って「飲む」のとは、その葡萄酒の味わいは全く異なったものとなります。映画やオペラの鑑賞も予備知識なしで見ると、ちょっと知識があるのとでは、面白さが違います。映画が2回目に見た時の方が面白いのと同じです。

ところで、私をはじめ葡萄酒を口に含んだのは、中学校の保健室です。その時からもう50年近く経ちますが、今でもまだその時の葡萄酒の印象が昨日のように脳裏をよぎります。今思えば、なぜ保健室に葡萄酒が置いてあったのが不思議に思います。みなさんもご存じと思いますが、葡萄酒には薬価がついています。日本薬局方になっていて、薬価は10mlが20・70円となっています。750mlのボトルに換算すると、

1550円ほどします。適応は、食欲増進、強壯、興奮、下痢、不眠症、無塩食事療法となっています。以前薬問屋に葡萄酒を注文しました。それは赤葡萄酒で500mlのボトルに入っていました。味わいはほどほどのものでした。みなさんご興味がありましたら、一度注文なさってみてはいかがでしょうか。

さてここで、私の独断で「葡萄酒が好きになる6つの近道」をお話いたします。

1. テロワール（土質）に興味を持つ。
2. 葡萄品種を知る。
3. 葡萄産地の地図を覚える。
4. ヴィンテージを知る。
5. 葡萄酒の用語を覚える。
6. 葡萄酒の香りの表現の言葉を知る。

1. 「テロワール」

葡萄酒は土地の表現です。土地が葡萄に個性を与えます。

2. 「葡萄品種」

葡萄品種を知るとは必須です。ピノ・ノワール、カベルネ・ソーヴィニヨン、メルロー、シャルドネ、ソーヴィニヨン・ブラン etc.

3. 「地図」

フランスのブルゴーニュとボルドーの地図をまず覚える。地図はコンピュータのファイルに

相当します。データを入れるところがないと記憶は整理できません。飲む葡萄酒の地図を思い浮かべて、その印象をファイル（地図）にインプットします。

4. 「ヴィンテージ」

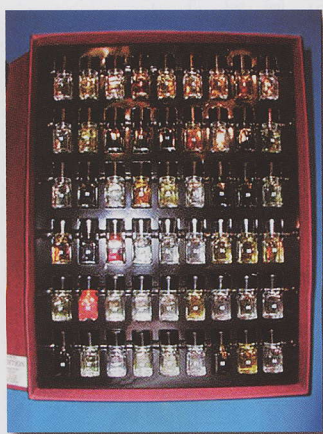
葡萄酒の面白さは収穫年により、趣が異なります。グレートヴィンテージは21世紀では、2000年。20世紀では1961年です。

5. 「用語」

私の愛読書である「ワインの言葉」是非この本を読まれることをお勧めいたします。たとえば「猫の小屋」「濡れ犬の香り」「エチケット」（ラベル）など。

6. 「香り」

葡萄酒の命は「香り」です。いくら味がよくても、「香り」が今一つのときは興ざめます。「ネ・デュ・ヴァン」という本があります。これは、香りを訓練するキットです。



Nez du Vin
(ネ・デュ・ヴァン、「葡萄酒の鼻」)